

第14部会

遍路の「接待文化」との相違点として、伊勢参宮の場合、「施行文化」と言えるほどの歴史的な継続の実態がないことがあげられる。もちろん、施行というキャッチフレーズを現在、使用する観光や行政関係者はいるものの、その概念の一般化普遍化についても丁寧な把握が必要である。

それでも、見てきた間接史料を重ねることで、巡る人々や巡られる人々の多様性はうかがえる。施行に対する肯定的な対応に対して、規制を強めていくような葛藤も確認できた。この点は、四国遍路に捉えられた日常の実践としての接待文化にも通底する点かもしれない。しかしながら、その対象に高齢者・障害者をはつきりと捉えられてはいない。

繰り返しになるが、伊勢参宮の史料からは、ルルドのオスピタリテ活動のような歴史的脈絡は見出しにくい。このことは、現在の参拝ボランティアと、伊勢の施行との脈絡の違いを考えなければならぬことを指摘したい。

いずれにしても、現段階では歴史的な実態を考察するため、関係する史料を広げだしたにすぎない。さらに丹念に目を通すことで考察を深めたい。

身延山参詣記にみる巡拝寺院について

望月真澄

身延山信仰を捉える視点として、身延山内に残る江戸信徒関

係資料について考察したことがある。本発表では、江戸からの身延山参詣道中に着目し、途中の巡拝寺院に伝わる資料を紹介し、身延山参詣における巡拝寺院の役割と身延山巡拝信仰の特徴について考えてみたい。今回は、江戸から甲州廻りの道中における巡拝寺院を検討することにする。

江戸より身延山に登詣する大きな道程は二つある。一つは、江戸より甲州街道を進み、甲府から身延道を南下する道程であり、もう一つは、東海道を西に進み、富士地域から身延道に入り、北上する道程である。この二つの参詣道の中でも、盛んに参詣された道程は、江戸より甲州街道を経て進む道で、身延山に参詣すると帰りは身延山より岩淵（富士川町）へ下り、東海道を進む道である。これは、近世後期の双六にも登場するほどの代表的な参詣道で、江戸からの身延山登詣の道中日記をみても、おかたはこの道程をとっている。

この参詣道の途中には、日蓮宗寺院や日蓮ゆかりの場所を巡拝する参詣路がとられ、これが参詣記に紹介されている。数々の参詣記には、堀之内妙法寺、休息立正寺、石和遠妙寺、甲府信立寺、甲府遠光寺、増穂昌福寺、小室妙法寺といった寺院が登場する。この他にも参詣途中に法華寺院を巡拝している場合がみられる。そこで、地誌類にみられる日蓮宗寺院関係記載と江戸講中関係資料や道中途中の寺院の性格についてみてみたい。

①堀之内妙法寺（東京都杉並区）は、道中記に、厄除け祖師を祀る霊場であり、行事の折には賑わっていたことが知られる。

②勝沼立正寺（甲州市休息）は、道中記に日蓮が甲斐国布教の

途中、「立正安国論」を講じた場所で、近くに輪石庵という庵が存在する。また、六院十二坊を擁する本寺格寺院であり、江戸の人が身延参詣に立ち寄る寺院として存在し、このため法華信徒にまつわる資料が伝存する。輪石庵には、明治・大正期と推定される石垣があり、そこには江戸町人の名前が刻まれており、江戸に住む信徒の参詣が絶えなかったようである。

また、立正寺境内の日蓮袈裟掛松の石塔や祖師堂内の常香盤は内藤新宿と四谷の講中が寄進しているものである。年紀はないが、恐らく近世に江戸の信者が身延山巡拝の途中に立ち寄り、信仰の証しとして寄進した仏具と考えられる。

③石和遠妙寺（笛吹市石和町）は、日蓮が甲斐巡教中にこの地を訪れ、石和川の鵜飼の霊に逢い、その供養のために石に法華経を書き、川に沈めたという霊場である。また、謡曲「鵜飼」にも歌われ、日蓮像と鵜飼像の開帳儀礼が本堂で行われ、参詣者が絶えなかったという。これは「鵜飼山本妙寺霊宝不残開帳、百足之由」と道中記にあるように、巡拝者に霊宝の開帳も行われていたようである。

④小室妙法寺（増穂町小室）は、甲斐の日記類によると、修験道の寺院であったが日蓮が立ち寄り、法論を行って改宗した寺院とある。

以上、身延山参詣道中における巡拝寺院の性格についてみてきた。その結果、江戸の人々が身延参詣途中に日蓮ゆかりの寺院に巡拝し、そこで堂宇や仏具の寄進行為を行っていたことが明らかになった。江戸における法華信徒の多い居住地は、谷中・浅草・日本橋・神田といった地域で、同地域内にある寺院

には、祖師像や七面大明神像といった神仏が勧請されていた。この地域の法華信徒は参詣講を組織して身延山に登詣し、巡拝途中の寺院等に信仰の証しとしての仏像・仏具類を寄進したのである。こうして、江戸後期に身延山参拝が高まっていくと、参詣道途中の法華寺院は道中記や案内記に巡拝寺院として登場し、身延山参詣における巡拝寺院として位置づけられていったのである。

仏教教団と講集団の関わり

—— 四国遍路の事例から ——

栗田英彦

四国遍路には多くの人々や組織が関わっている。先達に率いられた四国遍路を巡拝する講集団もその一つである。本発表では、八十八ヶ所札所寺院で構成される四国八十八ヶ所霊場会（以下、霊場会と略す）の後援団体である関西先達会および愛知県先達会に所属する講集団の講元と講員への発表者自身による聞き取り調査に基づき、札所寺院と講集団の関わりについて考察した。

まず、昭和三十年代に発足した霊場会および霊場会による公認先達制度の発展に、これらの講集団は大きな役割を果たしたことに触れておきたい。現在、霊場会の財政基盤は主に先達の補任・昇補などの先達会費によっているが、公認先達制度発足当初は思うように先達補任者は増えなかったらしい。そ